

記念講演会 (※2017年11月18日)



ジャーナリスト

さくらい

櫻井よしこ

演題「これからの日本と誇りある国づくり」

今、世界の状況が驚くほど変わっています。100年に1回の変化だと思わなければなりません。100年に1回の変化だと言えば、ご当地の方々は当然、明治維新を思い出すでしょう。ではこれから先、世界はどう変わるのか。その兆しはすでに非常に明らかな形となっています。

2013年9月10日、シリアのアサド大統領が化学兵器を使って国民を攻撃し、国軍が国民を攻撃したとき、国際社会はオバマさんに期待しました。しかし彼は「アメリカは軍事介入しない」と言いました。その理由は、「アメリカは世界の警察ではないから」。そのときから世界は、まさにどんでん返しのような変化をたどり始めたのです。

これに喜んだのはロシアと中国です。2014年3月、プーチンさんはウクライナからクリミア半島を奪いました。同じころに中国は、南シナ海でフィリピンやベトナムから島々を奪い、急ピッチで埋め立てを始めました。しかしオバマさんは動きませんでした。今ではもうロシアや中国を批判する声は国際社会にほとんどありません。そこにトランプさんが登場しました。

トランプさんとオバマさん、おふたりは全然違うタイプの人に見えますが、アメリカが国際社会のルールをつくり、面倒を見てあげるのもうまっぴらごめんだとおふたりとも言っています。私たちは、アメリカに完璧に頼るという考え方を変えなければならぬりました。

変わったのはアメリカだけではありません。今回、トランプさんが習近平さんと首脳会談を行いました。それを世界中の人たち

が、固唾を飲む思いで見守りました。

この首脳会談について、ワシントンポストは『いかにして、大国が自殺をしたか』と書いています。アメリカが大国としての命を自ら絶った。それが今回のトランプ、アジア歴訪であると。非常に厳しい評価です。ワシントンポストだけでなく、トランプさんをこれまで比較的支持してきたウォールストリートジャーナルでさえも、『今回は完璧にアメリカの敗北だ』と書いています。

つまり、世界において、政治の地殻変動が起きてしまったのです。これまではアメリカ優位でしたが、少なくとも対等になってきました。今度は中国が自分たち優位の状況を作っていくでしょう。

では、その中国はどのような世界を目指しているのか。習近平さんは言っています。「建国から100年の2049年までに、中国は世界の諸民族の上にそびえ立つ。それまでには軍事的に強大になり、経済的には、国民は先進国の民としての豊かな生活を享受するようになる。支配は中国の東にも西にも、南にも北にも、当然中国自身にも全部行き渡っている。そしてそれは、中国共産党の価値観、すなわち習近平思想に基づくものである」と。

一方、今回のトランプさんの訪中には、2つの大きな目的がありました。1つは北朝鮮の核やミサイルの開発を止めさせること。もう1つは、アメリカと中国の間にある極端な貿易不均衡を是正することです。

しかし実際はどうでしょう。中国政府はトランプさんを「国賓待遇プラスプラス」でもてなし、それに彼は手放しで喜びました。さらに、彼は習近平さんについて、偉大なリーダーであり、素晴らしい

友人であると言いました。

さらに中国は、トランプさんに28兆円にもものぼる経済協力プロジェクトを提示しました。しかしこの28兆円は、過去のアメリカから中国に投資された金額や、これから未来に行うであろうプロジェクトに必要なお金など、過去も未来も全部合算した金額です。未来のプロジェクトが全部実現するという保障はどこにもありません。

今、北朝鮮と中国の関係はものすごく悪いとみられていたのに、北朝鮮が中国の特使を受け入れています。さらに、金正恩さんは約60日もの間実験をしていません。アメリカの東部の心臓部に到達する大陸間弾道ミサイル「火星13号」の実験は、まだ1度も行われていません。これらの実験をしなかったら、アメリカが北朝鮮を攻撃しない・させないように中国がいろいろと動いた可能性があります。だから、トランプさんと習近平さんの会談のあと、北朝鮮問題があまり大きく浮上していません。

では、北朝鮮情勢はどうなるのか。金正恩さんは、新たな核実験をしないと、核を諦めるということはないでしょう。ミサイルもこれ以上実験はしないかもしれませんが、今までのところのミサイルは全部持っています。

するとどう実態が残るか。北朝鮮は韓国を狙う核や、日本国を狙うミサイルを何100基と持っています。そうするとアメリカが言っていた、自国アメリカを守るだけでなく、同盟国も守るという今までの公式の政策というものが事実上否定されるのではありませんか。日本と韓国は非常に危ない状況に置かれます。

北朝鮮問題は北朝鮮だけの問題に留まりません。米中の問題です。私たちは、何も知らない間に、アメリカと中国という2つの大国が、私たちが危ないところにおいて手を握るという状況に至ったということを認識しなければならぬと思います。

世の中はこのように変わっています。私たちが唯一の同盟国だと思って頼ってきて、できたらこれからも頼りたいと思う国・アメリカががらりと変わってしまいました。

プロフィール

公益財団法人 国家基本問題研究所 理事長

■経歴

1971～74年 クリスチャンサイエンスモニター紙 東京支局勤務
1975～77年 アジア新聞財団DEPTH(デプス)NEWS記者
1978～82年 同東京支局長
1980～96年 NTVニュースキャスター
1980年～現在 ジャーナリスト
2008年～現在 公益財団法人国家基本問題研究所理事長

このような状況の中で、どうやってそれぞれの民族が、それぞれの存在を守っていくかということを考えなければなりません。そこで、明治維新の頃の日本はどういう状況だったのかを見てみましょう。

幕末のわが国は、経済力も、軍資力も、情報力もありませんでした。そんな国はすぐに他国に侵略されてしまうでしょう。だから、ご当地からもなんとかしなくてはいけないという動きが出てきたのです。

佐賀藩は、黒船が来る前から、近代的な大砲や、鉄、兵器を作り、いろんな国々のようすを断片的ながら見て、このままではわが国は、してやられてしまうという危機感を持っていました。

150年前の先人たちは、わが国にないものがある。それを一刻も早く手に入れようと、「富国強兵」の政策を打ち立てました。これを掲げて、わが国は明治政府をスタートさせました。

もう1つ、「五箇条の御誓文」を発布しました。これは国民に対して、あなたたちは日本国の大御宝(おおみたま)です。あなたたちによってこの国は成り立っていますから、その知恵、力、思いのすべてを結集してください。みんながこの国、ふるさと、そして未来に対して責任を持ちましょう。一緒にやりましょうと、第2条、第3条、第4条、第5条にわたって示したものです。

この「富国強兵」「五箇条の御誓文」の2つを両輪として、明治新政府がスタートしました。ほとんどの国々が欧米列強の植民地にされたり、保護国にされたりしましたが、日本は日本国のままであり続けました。それは先人たちが、本当によく現実を見て対応できたからです。

150年経った今、私たちは危機的な状況に陥っています。これは150年前よりもさらに深刻なものなのです。

私はこのような危機的な状況に日本があるということを、ロータリアンの皆さん方と共有し、問題提起をし、みんなで考え、1日も早く日本をまともな民主主義の国にしなければならぬと思います。

■受賞

1994年 SJ賞(女性放送者懇談会賞)受賞
1995年 第26回大宅壮一ノンフィクション賞受賞
1998年 第46回菊池寛賞受賞、2010年 第26回正論大賞受賞

■著書

『一刀両断』『日本の未来』(新潮社)
『凍るる国家へ 日本よ、決意せよ 論戦2016』(ダイヤモンド社)
他多数